

2021年8月18日 水 山陽新聞 MEDICA に 「周産期センター」が紹介されました

7階の廊下を飾るのは「welcome to The EARTH」をテーマに、画家のかおかおパンダさんが描いた壁画アート。力強さと温もりが感じられる



倉敷成人病センター周産期センター新装

倉敷成人病センター（倉敷市白楽町）の周産期センターがリニューアルオープンした。これまでクリニック棟6階にあった産科外来をセンター棟8階に移設し、産科病棟や新生児室などが入る7階と一体的に運用することで、妊産婦の移動負担を最小限に抑える。一般診療を行うクリニック棟から分離したことで、感染症対策は大きく向上した。

新しくなった産科外来は木目調の明るく落ち着いたデザイン。スペースは以前の約3・8倍に広がり、診察室は3室から4室に増えた。採血や採尿、胎児の状態を評価するモニターなど診察前の検査も8階で行える。受診がワンフロアで完結し、待ち時間も短くなるという。

40床ある病室は全て個室。7階廊下に描かれた、明るい色調の壁画アート（全長35m）が母子を迎える。2500名未満の低出生体重児などに対応するNICU（新生児集中治療室、6床）も備える。これまで

明るく落ち着いたデザイン



明るく開放的な産科外来。以前より広くなり、受診がワンフロアで完結する

外来エリアと入院・分娩エリアでスタッフは別々だったが、センター棟に集約されたことで、外来段階から面識のあるスタッフが産後までサポートする。

倉敷成人病センターでは年間約1400人の新生児が誕生し、西日本の病院ではトップクラスという。周産期センターのスタッフは、産科・小児科の医師22人に助産師、看護師らを含

め約90人をそろえる。周産期センターセンター長の山崎史行医師は「新しい命を育む喜びをともにし、妊娠・出産から子育てまでを一貫して寄り添います」と話している。



全室個室の病室は、ゆったりした間取りで落ち着いた雰囲気